

麥搗

泉鏡太郎

青空文庫

傳つたへ聞きく、唐もろこし土ちやうあん長みやこ安みやこの都みやこに、蔣しやうせい生せいと云いふは、其その土と
 地ちくわんあん官い員ところの好ない處なにがし。何だん某だんの男だんで、ぐつと色いろみ身すまに澄をした男とこ。今いま
 時きほんてう本ほん朝てうには斯こんな様なのもあるまいが、淺あさぎ葱えりの襟えりに緋ひぢりめん縮せつ緬めん。拙せつが、
 と抜ぬぎえもん衣えもん紋もんに成なつて、オホン、と膝ひざをついと撫なでて、反そる。
 風ふうりう流おのづから自ぐうほ喜をよるこぶ偶ご歩ぶ、と云いふので、一いち六ろくが釜かま日びでえす、
 とそり出でる。懷くわい中ちゆうには唐たう詩し選せんを持ぢ參さんの見けん當たう。世せ間けんでは、
 あれは次じ男なん坊ぼうと、敬けいして遠とほざかつて、御ご次じ男なんとさへ云いふくらむ。
 處ところを惣そうりやう領りやうが甚じん六ろくで、三さん男なんが、三さん代だい目めの此この唐からやうと來き
 た日ひには、今いまはじまつた事ことではなけれど、親おやたちの迷めい惑わくが、憚はゞか
 りながら思おもひ遣ひやられる。

ところ
 處で、此の蔣才子、今日も又例の（喜偶歩。）で、靴
 の裏皮チャラリと出懸けて、海岱門と云ふ、先づは町盡れ、
 新宿の大木戸邊を、ぶらりくと、かの反身で、婦が突當
 つてくれれば可い、などと歩行く。

様子やうすが何どうも、ふびんや、餘り小遣こづかひがなかつたらしい。尤も
 地ぢもの張はりと俗ぞくに號がうする徒てあひは、懷くわい中ちゆうの如何いかんに係かゝはらず、恚かうし
 たさもしい料簡れうけんと、昔むかしから相場さうばづけに極きめてある。

最もう其その門もんを出ではなれて、やがて野路のみちへ掛かる處ところで、横道よこみちから
 出でて前まへへ來きて通とほる車まうへの上に、蔣生しやうせい日頃ひごろ大好物だいかうぶつの、素敵すてきと云
 ふのが乗のつて居ゐた。

ちらりと見みて、

「よう。」と反つて、茫然として立つた。が、ちよこくと衣紋繕ひをして、其の車を尾けはじめ。と婦も心着いたか一寸々々此方を振り返る。蔣生ニタリとなり、つかず離れず尾れをびす之、とある工合が、彼の地の事で、婦の乗つたは牛車に相違ない。何うして蜻蛉に釣られるやうでも、馬車だと然うは呼吸が續かぬ。

で、時々々ずつと寄つては、じろりと車を見上げるので、やがては、其の婦ツンとして、向うを向いて、失禮な、と云つたいろが見えた。が、そんな事に驚くやうでは、なか／＼以て地ものは張れない。兎角は一押し、と何處までもついて行くと、其の艶なのが莞爾して、馭者には知らさず、眞白な手を青い袖

口、ひらりと招いて莞爾した。

生事、奴 凧と云ふ身で、ふらくと胸を煽つた。(喜)

出意(外)は無理でない。

之よりして、天下御免の送狼、艶にして其の且美なもの

亦、車の上から幾度も振り返り振り返りする。其が故とならず

情を含んで、何とも以て我慢がならぬ。此のあたり、神魂迷蕩不

知兩足※ 也 字だけを讀めば

物々しいが、餘りの嬉しさに腰が抜けさうに成つたのである。

行く事小半里、田舎ながら大構への、見上げるやうな黒

門の中へ、轍のあとをするくと車が隠れる。

虹に乗つた中年増を雲の中へ見失つたやうな、蔣生其

の時とき顔がん色しよくで、黄たそ昏がれかゝる門もんの外そとに、とぼんとして立たつて見みたり、首くびだけ出だして覗のぞいたり、ひよいと扉とびらへ隠かくれたり、しやつきりと成なつて引ひ返つかへしたり、又またのそくと戻もどつたり。

其そこ處こへ、門もん内ないの植うゑ込こみ木こ隠かくれに、小こ女をんながちよろくと走はつて出でて、黙だまつて目めまぜをして、堀へいについて此こ方なたへ、と云いつた仕し方かたで、前さきに立たつから、ごぎんなれと肩かたを揺ゆつて、足あしを上う下へに雀こをどり躍みちびびして導みかれる、と小ちひさき潜くゞりもん門もんの中なかへ引ひ込こんで、利り口こうさうな目めをばつちりと、蔣しやう生せいを熟じつと見みて、

「あの、後のち程ほど、内ない證しょうで御ご新しん姐ぞさんが。屹きつと御お待まち遊あそばせよ。此こ處こに。可よごぎんすか。」と囁ささいて、すぐ、ちよろりと消きえる。「へい。」と、思おもはず口くちへ出でたのを、はつと蓋ふたする色いろ男をとこ、忍しの

びの體は喝采ながら、忽ち其の手で、低い鼻を蔽はねば成らなかつたのは、恰も其の立たせられた處が、廁の前、は何うであらう。しやうしうわいをしのでへいそくやゝひさし

蔣 忍 臭 穢 屏 息 良 久 は 恐 れ る 。

其處らの芥も眞黒に、とつぷりと日が暮れると、先刻の少

女が、鼠のやうに、又出て來て、「そつとく、」と、何にも

言はず袖を曳くので、蔣 生、足も地に着かず、土間の大

竈の前を通つて、野原のやうな臺所。二間三間、段々に

次第に奥へ深く成ると……燈火の白き影ほのかにさして、目の

前へ、颯と紅の簾が靡く、花の霞に入る心地。

彌が上に、淺葱の襟を引合はせて、恍惚と成つて、其の簾を

開けて、キレー水のタラ〜と光る君、顔を中へ入れると、南無

上段じやうだんづきの大廣間おほひろま、正面しやうめん一段高いちだんたかい處ところに、疊たゞみ二疊ふも
 あらうと思おもふ、恰あたかほのほも炎いけの池ごとの如ごとき眞鍮しんちゆうの大おほ火鉢ひばち、炭たん火くわの烈れ
 つく々つとしたのを前まへに控ひかへて、唯ただ見る一いつ個この大だい丈ちやう夫ぶ。漆うるしの中なかに眼こ
 の輝かゞやく、顔がんめん凡すべて髯ひげなるが、兩りやう腿も出だした毛けむくぢやら、蝟はりせんぼん
 の大おほ胡あぐら坐ざで、蔣しやう生せいをくわつと睨にらむ、と黒くろ髯ひげ赤あかく炎ほに照てら
 して、「何ど奴いつだ。」と怒ど鳴なるのが、ぐわんと響ひびいた。あつとも言い
 はず、色いろ男をとこ、揺ゆるやうにわなくと身みをくねると、がつくり
 と成なつて、腰こしから先さきへ、べたくと膝ひざが崩くづれる。
 少しば時らく目めが眩くらんで、氣きが遠とほく成なつて居ゐたが、チリくと琴ことが自し
 然ぜんに響ひびくやうな、珠たまと黄金こがねの擦すれ合あふ音おとに、氣きつけを注さ射つれた心こ

地ちがして、幽かすかすみに隅はうの方めで目めを開あけて、……車しやじやう上のの美人びじんがお引ひ摺きずりの蹴けだしづま出ま棲ときいろ、朱鷺しよき色の扱しよき帶いと云いふので、件くだんの黒くろ髯ひげの大きおほな膝ひざに、かよわく、なよくと引ひきつけられて、白しろい花はな咲さく蔓つる草くさのやうに居ゐるのを見みた。

「二に歳さい。」と呼よんで、髯ひげの中なかに赤あかい口くちをくわつと開あけ、

「何どうだ、美うつくしからう、お玉たまと云いつて己おのれが妾めかけだ。むゝ、いや、土む

龍ぐらもちのやうな奴やつだが、此これを美うつくしいと目めをつけた眼がんりき力りきだけは感か

心んしんぢやわ。だが、これ、代しろもの物ものも此このくらの奴やつに成なると、必かなら

ず主ぬしがあると思おもへ。汝なんぢつひにてんりうのにくをくらはんとおもふか汝なんぢ竟な想むね嗅か天あま龍りゆう肉にく耶や、馬ば鹿か野や

郎らう。」

言いひ畢はつて、肩かたに手てを掛かけ、雪ゆきなす胸むねに毛けだらけの手てを無む手ずと

置き、横に掴んで、ニタ／＼と笑ふ。……と婦も可厭はず、項も背も靡いて見える。

其の御様子を見せらるゝ、蔣生は命の瀬戸際。弱り果て、堪りかねて、「お慈悲、お慈悲、歸ります、お歸し下さい。」と矢たらに叩頭をするのであつた。

其の顔も上げさせず、黒髯は大喝して、
「成らん！」と喚いて、

「折角来たものを唯は返さぬ。奴、先づ、名を名乗れ。何と云ふ、何處の青二歳だ。」

悪く偽りを申上げると、股から裂かれさうに思つたので、おめ／＼と親の姓、自分の名を言ふ。

「お慈悲、お慈悲。」

是を聞いて、黒髯、破顔して笑を含み、

「はあ、嘘は言ふまい、此の馬鹿野郎。汝の爺と、己は兄弟

分だぞ。これ。」

「や、伯父さん」と蔣生蘇生つたやうに思つて、はじめて

性分の黄な聲を出して伸上る。

「黙れ！甥の癖に伯父様の妾を狙ふ。愈々以て不埒な奴だ。

なめくぢを煎じて飲まして、追放さうと思つたが、然う聞いて

は許さぬわ。」

と左右を顧み、下男等に言つけて、持つて來さした握太

な杖二本。

「這奴、尻を撲せ。」

「かしこ畏まつて候と、みぎひだり右左からえりくび頸首を取つてのめらせる、とお

めかめて妾面を蔽うた時、くろひげ黒髯は眉をひそ顰めて、

「や、撲すのは止める、杖が汚れる、やらんどし野郎禪がうすぎたな薄汚い。」

さてくあさま淺間しや、おや親の難儀が思はれる。先づ面を上げさせる。

で、キレー水するを熟じつと視ながめて、

「むゝ。如何にも其の面、親おやに似にぬ鼻はなの低ひくさを見みろ。あつてもな

うても同じ物ぢや、殺そいでくれう。」

と小刀こがたなをギラリとぬ抜く。

今は早いまは早はや、お慈悲じひ、お慈悲じひの聲こゑもか嘎かれて、しやうせい蔣生てばな手放てばなしに、

わあと泣出なきだし、なみあめ涙雨ごとの如ごとく下くだると聞きけば、き氣どくの毒どくにも又またあはれに

成なる。

「もう可ようござんす、旦那、堪かん忍にんして遣やらしやんせ。」
 と婀娜あだこゑな聲こゑで、膝ひざを擦さすつて、其その美人びじんがとりなしても、髯ひげを振ふつて肯きかないので。

「其そのかはり、昨日きのふ下した百ひやく姓せうから納をさめました、玄くろ麥むぎが五ご斗とござんしたね、驢ろ馬ばも病びやう氣きをして居ゐます、代ろにかはつてめんをましつみ贖あがなはしめん罪ざい」と云いふ。

「驢ろ馬ばの代かはりはおもしろい。何どうだ。野や郎らう、麥むぎを搗つくか。」
 生せい、連れん聲せい應おう諾だく。

「はい、はい、はい、何どうぞ、お慈じ悲ひ、お慈じ悲ひ。」
 「さあ、もう、おやすみなさいまし、ほゝほゝ。」

と婦たばが袖そでを合あはせる、さらりと簾すだれ。其その紅くれなゐの幕まくの外そとへ、

「失うせをれ。」

と下男げなん兩りやうにん人こし、腰たの立たない蔣しやうせい生せいを抱かへて、背戸せどへどんと搦つかみ出だす。

えつさ、こらさ、と麥むぎを背負しよつて、其その下男げなんどもが出直でなほして、薪雜木まきざつぽうの手てぐすね引ひいて、

「やい、驢馬ろば。」

「怠惰なまけるとお見舞みまひ申まをすぞ。」

眞晝まひるのやうな月夜つきよに立たつて、コト／＼麥むぎを搗ついたとき。

縁日えんにちあるきの若人わかうどたち、慎つしまずばあるべからず、と唐からの伯を父御ちちごが申まをさるゝ。

明治四十三年十二月

青空文庫情報

底本：「鏡花全集 卷二十七」岩波書店

1942（昭和17）年10月20日第1刷発行

1988（昭和63）年11月2日第3刷発行

※題名の下にあった年代の注を、最後に移しました。

※表題は底本では、「麥搗《むぎつき》」とルビがついています。

入力：門田裕志

校正：川山隆

2011年9月4日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

麥搗

泉鏡太郎

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>